

ターナーといえば『坊っちゃん』に出てくるターナー島は、彼の『チャイルド・ハロルドの巡礼—イタリア』がモデルではないかと言われている。また皆で釣りに出かけるのは、ターナーの趣味が魚釣りだったことを取り入れたのだろう。

そして『虞美人草』にこんな一文がある。『小説は自然を彫琢する。自然その物は小説にはならぬ』これはターナーの「自然を写しただけでは絵にならない」という絵画論の転化だろう。当時画壇は「風景は自然を写すもの」と考えていたが、ターナーは「思考・感情に訴えかけるもの」だと考えていた。当時の日本文壇に対する漱石の訴えかけそのものである。

また『虞美人草』では黄色という言葉が目を引く。それはターナーが揶揄されながらも特に好んで使った、当時の新色：クローム・イエローのことだろう。

そしてターナーは自然の猛威の強調として、敢えて人間を画面に登場させず、子供の頃から好きだった海景に嵐をよく描いた。漱石も『虞美人草』で風雨、嵐を多彩なヴォキャブラリーで表現する。また後世の人に「カラー・ビギニング」と名づけられたターナー30代の輪郭のない色彩だけで描かれた手法は、『虞美人草』のスフマートに見て取れる。漱石はターナーに自分と同じ意識を見出した。戦時下で敢えて牧歌的風景を描き、「伝統と革新」を旨とし、正義のために自国への抗議も絵に表したターナー同様、漱石の小説には自国への抗議も含まれている。